

トロピンCの泌尿器科的応用

京都大学医学部泌尿器科教室（主任 稲田 務教授）

教 授 稲 田 務
助 教 授 後 藤 薫
大学院学生 久 世 益 治

Tropin C in Urology

Tsutomu INADA, Kaoru GOTOH and Masuji KUZE

*From the Department of Urology, Faculty of Medicine, Kyoto University
(Director . Prof. T. Inada, M. D.)*

Tropin C is a combination of tropin, parasympatics blocking agent, and carmotin, one of the tranquillizers. It was used in 6 patients with urinary frequency due to trigone anomaly in 3 cases and irritative bladder in 3 cases. 3 patients remarkably improved and the others responded quite satisfactorily.

It can be said that tropin C is best used in urology for the patients having urinary frequency without recognizable organic lesion.

緒 言

泌尿器科領域において自律神経系緊張異常と密接に関係ありと考えられる疾患には、膀胱三角部異常症、夜尿症、尿管痙攣等があり、之等に就いては著者等の研究報告がある。著者等が之等の疾患に対して、副交感神経刺激剤トロピンを応用した臨床成績は、既に報告したところである（泌尿紀要3巻3号参照）

武田薬工株式会社は、今回トロピンに精神緊張緩和剤カルモチンを配合したトロピンC錠を市販した。よつて、著者等は本剤を頻尿を主訴とする膀胱三角部異常症等に使用して、少数例ではあるが認むべき効果を得たので、ここにその臨床知見を報告する。

薬 剤

トロピンCは1錠中に下記の成分を有している。

トロピン (DL・トロピルトロベート N・メチルプロマイド)	0.5mg
乾燥水酸化アルミニウム ゲル	150mg
カルモチン (ブロムワレリル尿素)	10mg
酸化マグネシウム	50mg

臨 床 知 見

頻尿を主訴とする膀胱三角部異常症等にトロピンC錠（以下TC錠と略す）を使用した成績は附表の如くである。以下各症例に就て記載する。

〔第1例〕A.K., 49, ♀, 膀胱三角部異常症。

数年前より頻尿の傾向があり、初診2週間前よりその程度をまし、残尿感、膀胱部不快感を伴うようになった。TC錠1日3回3錠宛服用7日間にて、残尿感、膀胱部不快感は消失し、更に7日間の投与にて頻尿は著明に減少した。

〔第2例〕M.G., 36, ♀, 膀胱三角部異常症。

初診3カ月前より頻尿（昼間約1時間に1回、夜間1～2回）、残尿感を来すようになり、医師の加療をうけるも自覚症の消失をみず当科に来院した。TC錠1日4回2錠宛服用14日間にて自覚症の消失をみた。

〔第3例〕T.H., 23, ♂, 膀胱三角部異常症。

初診2週間前より残尿感、排尿時の尿道不快感、軽度の頻尿（昼間5～6回、夜間0）を来すようになった。TC錠1日3回、1回2錠宛7日間の服用により、残尿感、尿道不快感は消失したが、尿回数は略々同様であつた。

〔第4例〕A.K., 28, ♀, 刺激性膀胱。

附表 トロピンC使用症例の概要

症 例	姓 名	年 令	性	病 名	症 状	トロピンC使用法	効果判定
1	A. K.	49	♀	膀胱三角部異常症	頻尿, 残尿感, 膀胱部不快感	9錠×14日	有 効
2	M. G.	36	♀	〃	頻尿, 残尿感	8錠×14日	著 効
3	T. H.	23	♂	〃	残尿感, 尿道不快感, 頻尿	6錠×7日	有 効
4	A. K.	28	♀	刺 戟 性 膀 胱	頻尿	6錠×7日	著 効
5	M. E.	30	♀	〃	頻尿, 排尿痛	9錠×7日+12錠×7日	著 効
6	S. Y.	5	♀	〃	頻尿, 排尿痛	3錠×14日	有 効

初診2週間前より頻尿(昼間30分～1時間に1回, 夜間1回), 残尿感を来たすようになった。膀胱鏡検査にて膀胱頸部の充血性変化, 検尿にて沈渣に白血球(+), 大腸菌(+)を認め, サルファ剤投与にて, 尿所見は全く正常となり残尿感は消失したが, 昼間1時間に1回の頻尿が遺残した。TC錠1日3回, 1回2錠宛服用7日間により頻尿の消失をみた。

〔第5例〕M. F., 30, ♀, 刺戟性膀胱。

初診7日前より頻尿(昼間18回, 夜間1～2回), 終末排尿痛を来たすようになった。検尿にて沈渣に白血球(+), 大腸菌(+)を認め, サルファ剤投与にて, 尿所見は正常となつたが, 自覚症は不変であつた。TC錠1日3回1回3錠宛7日間服用により, 排尿痛は消失し, 頻尿の減少をみた。更にTC錠を1日4回, 1回3錠宛服用7日間にて頻尿の消失をみた。

〔第6例〕S. Y., 5, ♀, 刺戟性膀胱。

初診7日前より頻尿(昼間1時間に1回, 夜間30分～1時間に1回), 終末排尿痛を来たすようになった。尿は清澄にて, 沈渣にも異常所見を認めなかつた。TC錠1日3回, 1回1錠宛服用7日間により, 排尿痛は消失したが, 頻尿は不変であり, 更に7日間の服用により夜間の頻尿は3回に減少した。継続投与して経過観察中である。

総括並びに考案

著者等は頻尿, 残尿感, 排尿痛等を主訴とする膀胱三角部異常症3例, 刺戟性膀胱3例, 計6例にトロピンC錠を使用して, 著効3例, 有効3例の結果を得た。

膀胱三角部異常症に就いては稲田の著書に詳細な論説がある如く, 本症の症状発現には自律神経系との密接なる関係があり, 後藤は本症にては副交感神経緊張亢進状態の多い事を示し

た。泌尿器科的種々の検査にて正常所見でありながら頻尿, 排尿痛等の膀胱症状を訴える刺戟性膀胱(Reizblase, irritable bladder)に就いては, Artner, Brandstetter und Haschek は綿密な検査を実施して, 本症の患者は自律神経不安定状態を有することを報告している。更にその治療法に言及して, 各種の自律神経剤の他に, 種々の鎮静剤の投与が効を奏することを述べている。著者等の3例の内2例(第4, 5例)は, はじめ膀胱炎の所見を呈していたが, サルファ剤使用により尿所見が正常に復した後も, なお膀胱症状を訴えた症例で刺戟性膀胱の範疇に属すると考えて, 本剤を応用して著効を得たものである。

又, Artner 等は刺戟性膀胱の患者に不安感等の精神的障害を伴うことを指摘しており, 膀胱三角部異常症の患者にも同様の事がみられる。これらの疾患に副交感神経遮断剤トロピンに精神緊張緩和剤カルモチンを配合したトロピンC錠が, 効果あることはその薬理作用より当然考えられるところである。

本剤使用による副作用は1例も経験しなかつた。

結 語

副交感神経遮断剤トロピンに精神緊張緩和剤カルモチンを配合したトロピンC錠の応用により, 次の如き臨床知見を得た。

頻尿を主訴とする膀胱三角部異常症3例, 刺戟性膀胱3例, 計6例にトロピンC錠を使用して, 著効3例, 有効3例の結果を得た。

本剤使用による副作用は1例も経験しなかった。

文 献

1) 稲田：膀胱三角部異常症，昭26。

2) 後藤：泌尿器科領域に於ける自律神経系の研

究，皮紀要モノグラフ第4集，昭29。

3) 稲田・後藤・山崎・玉置：泌尿紀要，3：235，昭32。

4) Artner, J., F. Brandstetter und H. Haschek : Die Reizblase der Frau, Zshr. Urol., 53 295, 1960.